

特集

リッツ・カールトンに学ぶ「掃除の価値」とは何か？

アフリカの街をキレイに たけし日本語学校の挑戦 / 書評『分解の哲学 腐敗と発酵をめぐる思考』

Kizuku プロジェクト@葛飾 / 秘境を掃除する 真言宗総本山高野山

世界は掃除でつながっている。

【発行元】 有限会社光永ビルサービス
【ディレクション】 NPO 法人 Talking
【文】 日渡健介・大塚耕一
【校正】 小川みなも
【デザイン】 泉田剛

掃除とともに、考える。

TOTONOU 整う Vol.1

¥0
TAKE
FREE

春
SPRING

二〇二四年四月

Topic2

KIZUKU PROJECT @KATSUSHIKA

掃除から学ぶプロジェクト



・水元スポーツセンター公園を掃除する子どもたち

<https://kizuku-project.com/>
(詳細はホームページでご確認ください)



まるで宝物をさがすようにゴミを拾う子どもたち。ゴミ拾いを通して豊かな心を育む「Kizuku プロジェクト」が葛飾区ではじまりました。街をキレイにする中で、いろいろなことに「気づき」、子どもと大人、企業と地域の深い関係を「築い」てほしい。そうした思いを込めた Kizuku プロジェクトに、地元の小学生8名が集まってくれました。

はじめに「おそうじキッズセミナー」で、掃除や片付けの意味について考えます。フランスのバリでおきたゴミ回収業者のストライキをテーマに、日常を陰で支える清掃活動について議論します。単に「言われたからやる」ではなく、その理由を考えるはじめての体験で、たくさんの発言が飛び交いました。そして実際の「そうじタイム」。ゴミ拾いという義務感や退屈といったイメージがありますが、子どもたちの眼



は好奇心でいっぱい。楽しそうに街の公園を掃除する姿に、大人たちも驚いていました。

このプロジェクト、もともとは(株)カナック企画の社内での清掃活動でしたが、地域を巻き込んでいきたいとの思いから、かつしかFM と光永ビルサービスの3社での共同プロジェクトに発展しました。主催したカナック企画の岡村さんは「子どもたちと人の役に立つことを一緒にやるって幸せなことなんだと気づきました。優しい気持ちになって癒される素敵な時間でした」とイベントの成功について語っています。年齢、性別、肩書や国籍を問わず誰もができるゴミ拾い。日常の見えないところにある価値に気づき、感謝や尊敬の心を育んでいってほしい。そんな願いをもった新しい掃除文化が葛飾区から生まれようとしています。

Essay

第一回

秘境を掃除する

真言宗総本山高野山

世界遺産高野山。一二〇年前に弘法大師空海が開山した真言密教の聖地である。二〇二三年一月一日〜一日に

かけ、真言宗総本山金剛峯寺や別格本山普賢院にて仏教と掃除について学ぶ機会を得た。

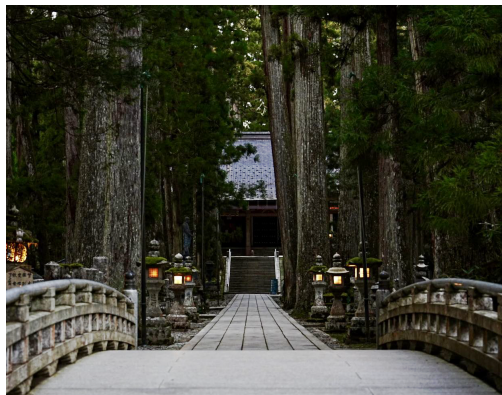
仏教における掃除、そこにはおもてなしの心が隠れている。神聖な仏様や高野山を訪れる方々を温かくお出迎えするにあたり、場を清めることは第一のおもてなしなのだ。何気なく見聞きしていたお祈りの作法やお経も、実は最初に仏様をお迎えするお清めのパートがあり、その後には仏様が降りてきてお祈りし、最後にお見送りのパートがある。降りてきてくださった仏様にも訪問してくださった方々にも、神聖な場所である高野山が思ったよりも汚かったとがっかりさせてはならない。

とはいえ、なんでもかんでもキレイにすれば良いという訳ではない。「ありのまま」の大切さも教えていただいた。奥の院にある墓石や灯籠につく苔。「この苔は掃除をしないのですか？」と質問すると「ありのままがいいのです」との答えであった。一人で奥の院を歩いて行くうちに、墓石や灯籠が周りの木々と一体化し、自然と調和していることに気づいた。まだ真新しい墓石や灯籠には転校生のような緊張感があり、古びた墓石や灯籠には貫禄と懐の深さを感じた。おおらかな大自然、ありのままであるからこそ生まれ

る調和。その調和によって生まれる安心感。奥の院は大きな優しさに包まれているようであった。

空海が高野山にて開創した理由に、須弥山の思想がある。須弥山とは古代インド仏教の世界観で仏教世界の中心に位置する想像上の山である。空海は高野山を訪れた際に須弥山のイメージを重ね、密教を修行するのに最も相応しい場と考えこの地を選んだ。そして、四季が織りなす美しい大自然のなか大伽藍の金堂ならびに根本大塔を中心とした立体曼荼羅を建立し、真言密教の中心地となる聖なる場所を築いた。神聖な仏様、神聖な場所を訪れる人、高野山の自然、あらゆるものへのおもてなしの心。掃除はそのあり方なのだと思わせていただいた。

(大塚耕一)



・高野山奥之院の中の御廟の橋

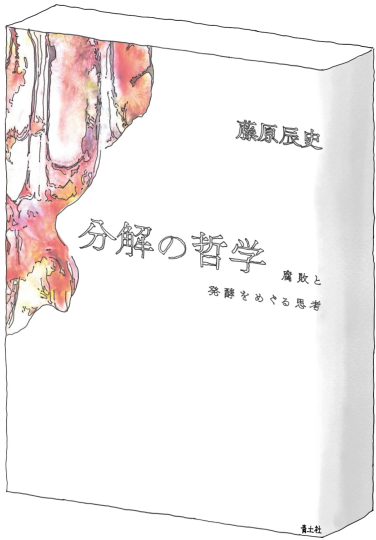
書評『分解の哲学 腐敗と発酵をめぐる思考』

生産に対する分解。生産力だけが重視される現代社会では、その対極にある分解の過程が注目されることは少ない。しかし、両者は本来世界の表裏であり、分け隔てることはできない。もし分解が止まってしまえば、世界はたちまちゴミで溢れてしまうだろう。世界の隠れた側面を多様な視点から考察したのが本書である。

品川の公共住宅の掃除おじさんにはじまり、ネグリ・ハートの政治理論、フレーベルの積み木教育、チャベックのSF小説と、ジャンルをとびこえ自由に展開していく思考。そのプロセスをたどるなかで、私たちの生活がいかに分解で溢れているかに気づく。動物や木の葉は、他の生物に食されることでその生命を支え、分解され排泄される

ことで、新たな生命の誕生の要素となる。子どもは解体することでものごとの仕組みを学び、都市はごみ収集と清掃を回転させ続けることで、快適さを保持している。

生産力の向上を目指す社会では、常に効率と意味が求められ、無傷で完璧なものが美しいとされる。ムダが排除され意味で満たされた生活は、快適であるようにみえながら実際には窮屈で窒息しそうになる。分解の世界は、腐敗の世界である。ものは食され、腐り、発酵し、解体されていく。そこには、醜悪でありながら静寂で、どこか美しい生命の時間が流れている。生命の循環が生み出す消極的美学。これこそ私たちの生活が取り戻すべきものではないだろうか。（日渡 健介）



『分解の哲学 腐敗と発酵をめぐる思考』
藤原辰史著（青土社、2019年）

Topic1 アフリカの街をキレイに たけし日本語学校の挑戦



「一〇〇〇年代に「ここがヘンだよ日本人」で話題となったゾマホンのたけし日本語学校が開校二〇周年を迎えた。アフリカのベナン共和国にて、授業料無料、常時二〇〇人の学生をかかえ、一〇〇人以上の留学生を日本に送ってきた。この学校で昨年からまちのそうじプロジェクトがはじまっている。学校を運営するNPO法人IFEの山道昌幸さんにお話をうかがった。

なぜそうじプロジェクトを？

「本校は、アフリカでも日本文化を味わう場を作りたいとの思いから設立されました。これまで多くの留学生を日本に送るなかで、自分の利益だけでなく人のためにも働くことを学ぶことが、よりよい国際交流につながるの思いがありました。そのため、何をしようかと考えたとき、シンプルにおもいついたのが掃除でした。」

具体的にはどのような活動なのでしょう？

「毎週日曜日の午後一時〜二時まで、学校のまわりの地域を掃除します。はじめに掃除の意味について、日本の掃除の映像をつかってレクチャーしマインドセットを学びます。自由参加なので毎回四〜五名で行っています。ベナンでは自分の家以外の場所を掃除する文化がなく、はじめは「頭がおかしいのじゃないか」と思われてました（笑）。でも、次第に近隣の子どもたちが遊び感覚で参加するようになり、回を重ねるにつれ地区長さんや、地域のイスラム教の指導者の方々からも応援いただくようになっていきます。」

今後の展望をお聞かせください。

「この体験から、人のためになる仕事をしたいと思う学生がふえればうれしいですね。人の役に立っているという実感が人を育てると思うんです。掃除は人類が定住した時にはじまった普遍的な営みだと思っています。誰にでもすぐできる掃除ですが、その活動をとおして人のためになること、仕事の本質的な喜びを体感してもらえよう活動をつづけていきたいです。本校も設立当初は話題にこそなりましたが、否定的な声も多く支援者はほとんどいませんでした。しかし、二十年間の活動の積み重ねによって、街に日本語が飛び交うような日本とアフリカをつなぐ大きな架け橋になりました。今回のプロジェクトも十年、二十年とつづけていくことで新たな文化が育っていくと信じています。」

リッツ・カールトンに学ぶ「掃除の価値」

とは何か？

インタビューの全文はこちらのホームページからご覧いただけます
(<https://keoisukacan.com>)



・勤務最終日にサプライズの花束をうけとる大塚さん（画面中央）

プロフィール：大塚 耕一（おおつか こういち）

1981年東京都葛飾区生まれ。有限会社光永ビルサービス代表取締役。2005年にザ・リッツ・カールトン大阪に入社。掃除への考え方に衝撃を受け、家業の清掃会社を継ぐことを決意。2018年に3ヶ月間の肉体改造で雑誌『Tarzan』の表紙を飾る。掃除の持つ可能性を探究するため、2023年より掃除の哲学研究会とKizukuプロジェクトを始動。趣味は読書、ゴルフ、キャンプ。

掃除との出会いについて教えてください。
私の家は祖父からつづく清掃会社で、子どものときから掃除は身近にありました。家族的な雰囲気の中で、社員旅行で海やスキーに行った思い出は、今でも記憶に残っています。父が会社を継がなくてもいいと言っていたこともあって、将来の進路に清掃業界は考えていませんでした。大学時代はアメフト部の主将だったこともあり勉強よりもスポーツばかりしていましたね。大学院進学を迷っていたところ、知り合いの紹介でカナダにワーキングホリデーに行くことになり、一年半をすごし日本に帰国しました。

リッツ・カールトンでの仕事はどうでしたか？
料飲部を半年ほど経験したあと宿泊のセキュリティ部門に配属され、ホテル全体を学びました。その後、ザ・リッツ・カールトン東京の立ち上げの話がもちあがりました。開業に集まったチームは素晴らしい、人生で最も貴重な体験の一つです。そんなある日、エグゼクティブの方に「ホテルで最も大切なことは何か？」と質問されたんです。私はニーズの先読みなどサービスにかかわることを答えました。しかしそうではなかった。「サービスの前提には一〇〇%の清掃と一〇〇%の安全があつて、それは一秒たりとも欠かすことはできないし、常に一〇〇%でなくてはならない。」この言葉に衝撃を受けました。これまで家業でやりたくなかったと思っていた清掃が、世界で最も質の高いサービスのホテルが最も大切にしていることだった。この瞬間に自分の中で掃除に対するイメージが転換しました。そして「家業を継ぎ清掃業界のイメージを変え、その価値を社会に伝える仕事をしていこう」と決心したんです。

清掃業界に入ってからどんなことを？
自分の仕事の考えに自負もあり、働くことの理想を語っては職場では浮いていましたね。自分がいいと思った仕組みや思想を取り入れれば失敗する日々でした。何をやってもうまくいかない日々が3、4年もつづき自信を失っていました。ふりかえると、やりたいことは間違っていないのですが、やり方が間違っていたんです。そんななか、雑誌『Tarzan』で「脱

げるカラダ」という肉体を変えて表紙に出るといふ企画を見つけたんです。当時は変わらない現実を、会社や業界など他人のせいにしていました。だったらこの企画を通して自分に向き合ってみよう。幸い家族からの理解もあり選挙も通って『Tarzan』二〇一八年七四五号の表紙を飾ることができました。自分に自信が持てるようになると、人に対する接し方も変化していくんですね。先輩から「大塚さんの会社は五〇年つづいていて、大きな船が動いているようなもの。ゆっくり舵をきつていこう」とのアドバイスをもらい、気持ちが切り替わりました。

そこからどのように変化したのでしょうか？
まずTwitterで情報発信をはじめました。地道に発信をつづけていくうちに、人とのつながりが生まれ、講演依頼が来るようになったんです。だれかと一緒にやるフェーズに切り替わり、カナック企画、かつしかエンとの「Kizukuプロジェクト」が生まれました。次第に「掃除をすれば会社が儲かる、運気が上がる」みたいな言説に違和感を持つようになり、掃除への理解をより深めたいと思うようになりました。そんななかNPO法人Talkieに出会い、掃除の哲学研究会が始まったんです。研究会では、哲学や人類学、都市論など多様な文献の読書会をおこなっています。掃除について人と話す事がこんなに面白かったことに驚いています。最近では、掃除の概念にひろいろなことが結びつき、高野山の空海生誕一三〇〇年に参加しました。メアリ・ダグラスの『汚穢と禁忌』を読むと、どこか西洋的な議論だと感じます。今後は、東洋的な視点からの掃除論も探究していきたいです。